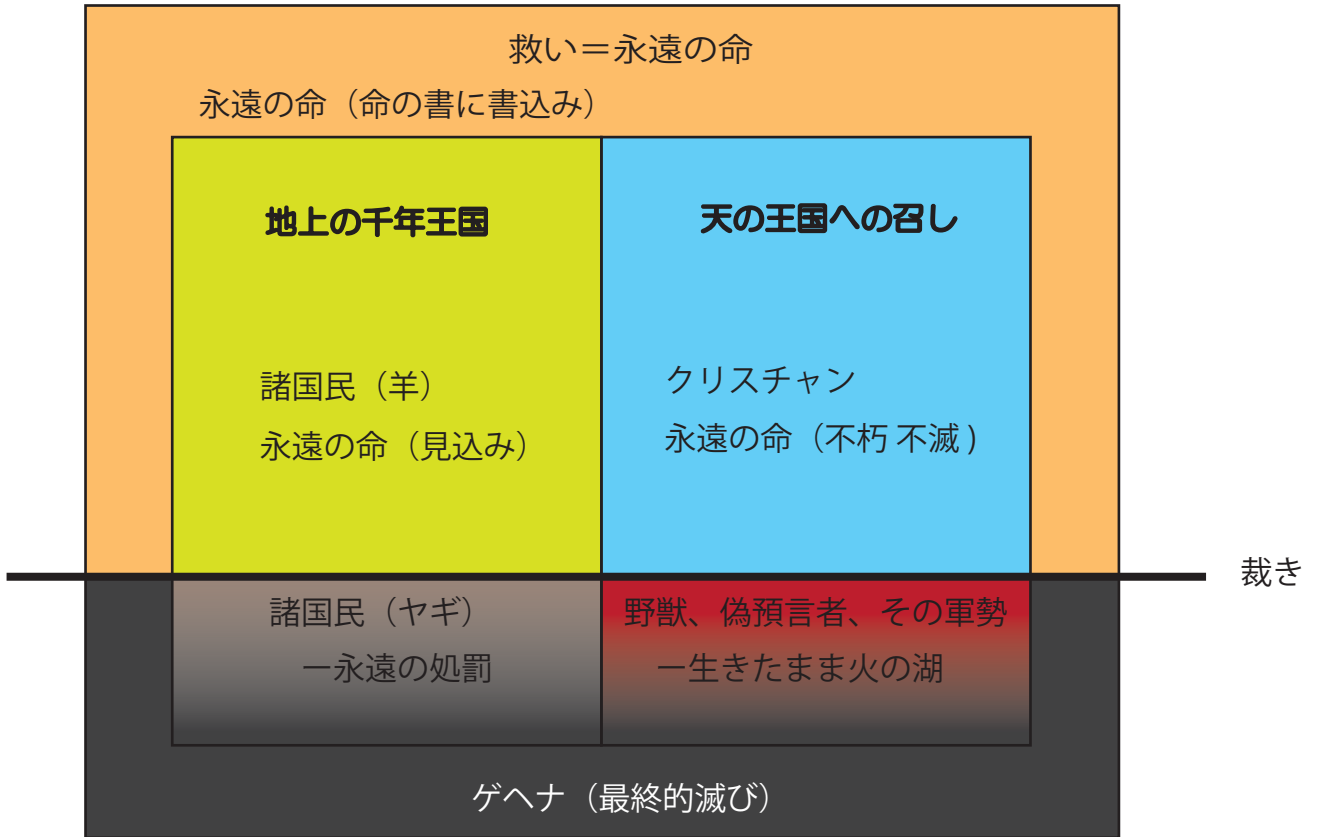


裁きの種別



上の図表の「諸国民 (羊)、諸国民 (ヤギ)」は 見慣れない表現だと思いますので、最後にこれに付いて解説しておきます。 黙示録の中で、千年王国に生き残るのは「諸国民」であるとされてます。また「地の王たち」もそこに存在しています。(これらの詳細については別資料：「ハルマゲドン以降の時と場所を考察する」をご覧ください。)

「この方 (キリスト) の口からは、鋭い剣が出ている。諸国の民をそれで打ち倒すのである。また、自ら鉄の杖で彼らを治める。[ 牧する (新世界訳) ] (黙示録 19:15 新共同訳)

この聖句を考慮するに当たって、先ず、「鉄の杖」に関する理解を深めるために詩編 2 編を参照しましょう。

「なぜ諸国の民は騒ぎ立ち、国たみはむなしいことをつぶやきつづけたのか。地の王たちは立ち構え、エホバとその油そそがれた者に敵対し、・・・わたしは諸国の民をあなたの相続物として、地の果てをあなたの所有物として与えよう。あなたは鉄の笏をもって彼らを砕き、彼らを陶器師の器であるかのように粉々にする」。それで今、王たちよ、洞察力を働かせよ。地の裁き人たちよ、矯正を受けよ。恐れを抱いてエホバに仕え、おののきつつ喜べ。子に口づけせよ。神がいきり立ち、あなた方が道から滅びうせないためである。」(詩編 2:1-2, 8-12)

詩編 2 編は明らかにハルマゲドンにおける神の大いなる日の戦争の時の預言ですが、ここに「鉄の笏」を振るうことが描写されていますが、その結果には二種類の異なる結果があることが分かります。1 つは「砕き、粉々にする」つまり「滅び」です。

しかし、この笏を使う本来の目的は、恐れを抱かせ、矯正を受け入れ、子に口づけして、滅び失せないようにすることです。

もし、「鉄の笏」が滅びを象徴するのであれば、キリストは、神から相続物としていただいた「諸国の民」をその直後に皆殺しにすることになってしまいます。

そのような本末転倒になることを意図されることはありません。

同様に、黙示録 19:15 の表現もやはり、二通りの行動が描写されています。

一つは口から出る剣で諸国の民を打ち倒すこと、そしてもう一つは、鉄の杖で彼ら（諸国民）を牧するという行動です。

この2つの区分が「左」と「右」に分けられる「ヤギ」と「羊」の区分でしょう。

ここで牧すると訳されている原語は ギ語：ποιμανεῖν [ポイマーネイ] で、この語は「羊飼い」を意味する ギ語：ποιμὴν [ポイメン] を含んでおり字義的には「羊飼いの働きをする」という意味です。

ということは、少なくともここでは「諸国民に対して羊飼いの働きをする」ということです。ですから、「諸国民」は「羊」とみなされていることが分かります。

真の羊飼いが、神から与えられた自分の羊を「皆殺し」にすることはありません。

キリストは、彼らをご自分の千年王国に導き入れ、優しく、そして恐らく時に厳しく、牧して、最終的に「永遠の命」を得られるように世話をされるということです。

そしてそのために、あの邪魔者である、サタンを無活動にします。

「悪魔でもサタンでもある・・・竜を・・・底なしの淵に投げ入れ、鍵をかけ、その上に封印を施して、千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさないようにした。」  
(黙示録 20:2,3)

最後の裁きで「諸国民」がすべて滅ぼされているなら、「もはやそれ以上」サタンに惑わされる「諸国民」などどこにもいないことに訳ですから、サタンを封印する必要もないことになります。

以上のことから、結論として「永遠の命（の見込み）」に入る人々とは、誰なのかという質問に対して、こうした答えが出せるでしょう。

どうしても矯正を受け入れようとしない、頑として子に口づけしようとはしない人々はやむなく、口から出る剣で、なぜ滅ぼされるのかを納得させられた上で滅ぼされることとなりますが、キリストの弟子であるという理由で、自分の持つもので、彼らを支援した人々、事態を飲み込んで、矯正を受け入れた人々は、みな「諸国民」ですが、「羊」として右に分けられ「世の基が置かれて以来あなた方のために備えられている王国を受け継ぎなさい。」と言われる人々であると考えられます。